

2010年11月11日

シリーズ調査「われら信州人」
「自然と環境編」
第3回調査
報告書
(2010年4月調査)

調査の設計	1
今回の結果と概要	2



社団法人 長野県世論調査協会
Tel 026-233-3616 Fax 026-233-3610
<http://www.nagano-yoron.or.jp>

<シリーズ調査「われら信州人」のテーマ>

	I	II	II
郷土・地域意識編	第1回 1994年11月調査	第6回 2000年8月調査	第11回 2008年3月調査
	・住みやすさ	・住みやすさ	・住みやすさ
	・長野県の将来の見通し	・長野県の将来の見通し	・長野県の将来の見通し
	・愛着感	・愛着感	・愛着感
	・住み続けたいか	・住み続けたいか	・住み続けたいか
	・県民として誇れるもの、自慢できるもの	・他県と比べて平均以上と思えること	・地域との関わり
	・長野県民の気質	・長野県民の気質・人生観	・長野県民の気質・人生観
		・自分の人生で長野県に住みたい時期	・自分の人生で長野県に住みたい時期
	・「ふるさと」と思う場所	・長野県の向かっていく方向	
	・信州のシンボル	・信州のシンボル	
生活編	第2回 1995年11・12月調査	第7回 2002年5・6月調査	第12回 2009年5月調査
	・現在の生活の満足度	・現在の生活の満足度	・現在の生活の満足度
	・自由な時間の過ごし方	・自由な時間の過ごし方	・自由な時間の過ごし方
	・普段感じている不安や悩み	・普段感じている不安や悩み	・普段感じている不安や悩み
	・隣近所との交際状況	・隣近所との交際状況	・衣・食のこだわり
	・今関心を寄せているもの	・お祈りや信心	・お祈りや信心
	・食生活において気をつかうこと	・食生活において気をつかうこと	・日ごろ充実感を覚えるもの
	・作っている自家製の漬物	・「食」への関心、こだわり	・日本社会の格差
	・洋服・衣類を選ぶのは誰	・県外への外出	・生活の中の笑い
	・情報・通信機器の中で現在家庭にあるものまた今後購入したいもの	・情報・通信機器の中で現在家庭にあるものまた今後購入したいもの	・情報・通信機器の中で現在家庭にあるものまた今後購入したいもの
自然と環境編	第3回 1997年3月調査	第8回 2004年4月調査	
	・信州の自然について	・季節の好き嫌い	
	・自然と人間の関係	・自然とのふれあい体験、野外活動	
	・信州の自然は守られているか	・ダム、リゾート開発の是非	
	・信州の自然景観について	・近隣からの環境被害	
	・10年前と比べてどうか	・自然・生活環境で心配なこと	
	・美観を損ねるもの	・省エネルギーの心がけ	
	・環境保全のために日頃心がけていること	・自然・環境破壊をくいとめるものは何	
・自然・環境破壊をくいとめるものは何	・メディアとの接触度合い		
	・内閣、政党、県政の評価		
家族編	第4回 1997年12月調査	第9回 2005年10月調査	
	・家族と話をする頻度	・家族と話をする頻度	
	・結婚観	・結婚観	
	・家庭の役割	・家族・家庭の役割	
	・主導権を握るのは誰	・主導権を握るのは誰	
	・家庭生活に必要なもの	・老後の親と子	
	・子供に期待すること	・家庭の周辺 10年後は？	
	・望ましい家庭生活	・子育て環境	
	・青少年の犯罪の原因	・親と子・父と母	
	・現在の家庭生活の満足度	・現在の家庭生活の満足度	
・老後の不安	・老後の不安		
・親戚づきあいの程度			
教育編	第5回 1999年3月調査	第10回 2006年10月調査	
	・子供への接し方	・子供への接し方	
	・一芸、推薦入学の是非	・一芸、推薦入学の是非	
	・習い事について	・習い事について	
	・「長野県は教育県」と思うか	・教育と人生観	
	・学校の完全週五日制について	・長野県の進学環境	
	・期待する小学校の先生の資質	・学校活動への参加	
	・いじめにあった子供の相談相手は	・望ましい義務教育のあり方	
	・学歴の受けとめ	・自分は教育熱心か	
	・中・高一貫教育への期待度	・中・高一貫教育への期待度	
・日本の教育の全体的な方向	・日本の教育の全体的な方向		
・学習塾の必要性	・学習塾に通わせているか		

I 調査の設計

調査の目的

長期シリーズ「われら信州人」調査は1994年、信州の人と暮らしを見つめ、郷土の特性を探ることを通じて、地域に根ざしたより良き明日を切り拓くことを願いにスタート。5つの分野 - 郷土・地域意識 生活 自然と環境 家族 教育 - の基軸テーマを循環させる方法を取っている。

「自然と環境編」は、1997年3月に第1回、2004年4月に第2回が行われ、今回は6年ぶりの実施、通算では13回目となる。

この6年間、国内外・県内外とも大きな変化があった。2008年のリーマン・ショックをはじめとした経済危機が、世界経済に暗い影を落とし、いまだに出口は見えない。アメリカにはオバマ大統領が誕生し、地球環境破壊の最たる核兵器の廃絶を訴えた。

国内では09年に歴史的な政権交代が実現したものの、民主党政権は混迷が続き、環境問題に指導性を発揮できない状況のままだ。

長野県も田中県政から村井県政、そして阿部県政に変わった。ダム建設への姿勢も「脱ダム」から「穴あきダム」着工へ変化してきている。

今回の調査は温暖化と異常気象が指摘され、地球規模での環境保護が叫ばれる中で、自然の資源に立脚して生きる長野県民の意識と行動はどう変わってきたのか、どうしようとしているのか探った。

調査の全般にわたり初回から、飽戸弘・東大名誉教授、坂井博通・埼玉県立大学教授の監修を仰いでいる。

調査の設計

調査対象	長野県内に住む20歳以上の男女800人
抽出方法	層化三段無作為抽出法。対象の各市町村の選挙人名簿から抽出
調査時期	2010年4月24日(土)～5月9日(日)
調査方法	個別面接聞き取り
調査地点	19市6町6村の計46地点 (1地点20人が34地点 1地点10人が12地点)

回収結果

有効回答	587人(回収率73.4%) 男性280人 女性307人
------	------------------------------

<注> 報告書のパーセント数字は小数点第2位を四捨五入。合計が100にならない場合がある。

今回の結果と概要

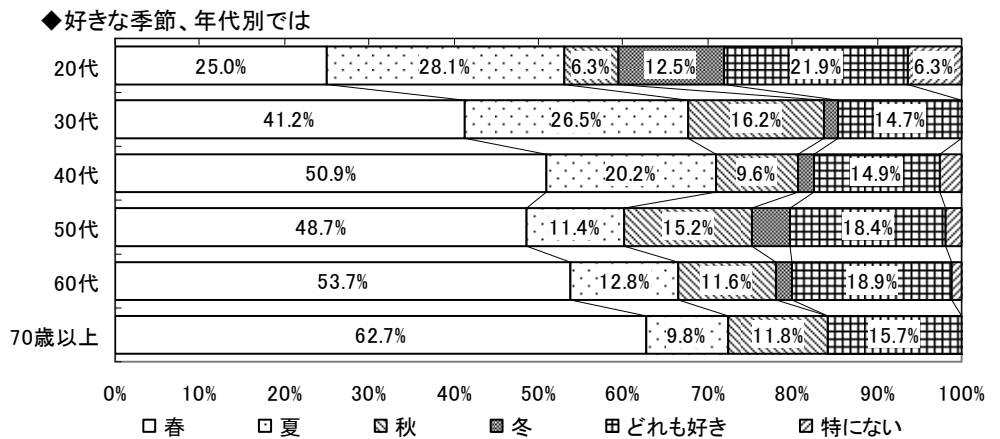
信州のイメージと自然との接触

郷土の表現、好みは「信州の...」

県民が好む郷土の表現は「信州の...」が、前回よりも24%アップし60%に迫った。「長野の...」「長野県の...」が相対的に低下、信州という言葉に愛着感が増しているようだ。

「信州」という言葉から連想するのは「山や川の自然」「観光地・温泉」の1、2位は変わらないが、3位には「県歌信濃の国」が入った。2008年が県歌制定40年で、近年関連する書物、CDなどが相次ぎ出て話題になったことも影響していると思われる。

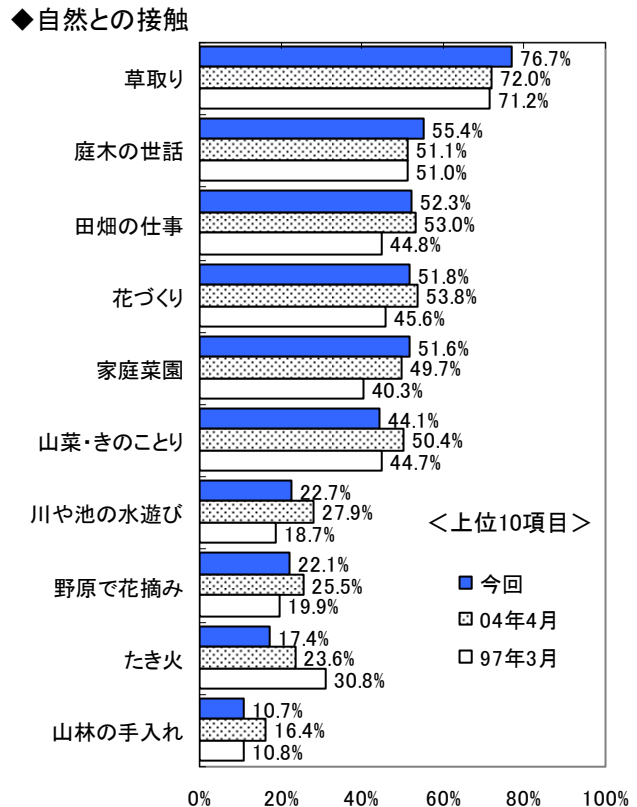
好きな季節は「春」のトップは不動だが、調査3回目で初めて50%を割った。嫌いな季節の「冬」は大きな変化がない。



自然との接触、冬のスポーツ低迷

日頃の自然との接触で「草取り」が増えて77%、「庭木の世話」「田畑の仕事」「花づくり」「家庭菜園」は50%台で続き、04年との比較では大きな変化がない。「たき火」はダイオキシンが騒がれた影響か、97年、04年、今回と減少傾向。

一方「山林の手入れ」「山菜・きのことり」「川や池の水遊び」は前回より減り、レジャーでも「スキー・スノーボード」「ハイキング」「登山」「キャンプ」といった山・高原や川での体験が減っている。特に海なし県で、ウインタースポーツは身近だったにもかかわらず、「スキー・スノーボード」が「海水浴・スキューバダイビング」に逆転されたのは、県民の体験でも県内のスキー場低迷を裏付けている。



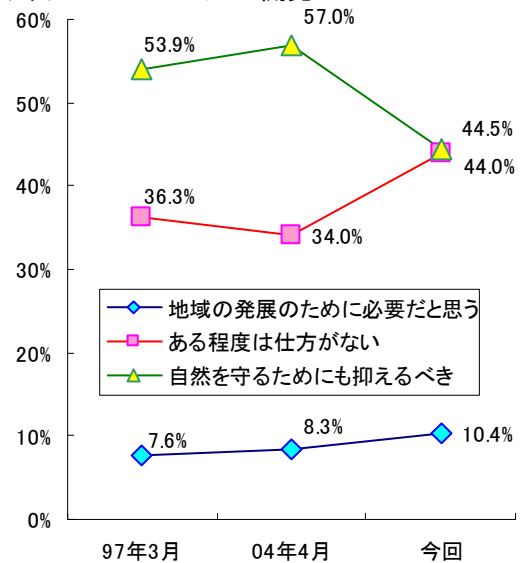
開発と規制

リゾート・マンション容認派 5 割超え

ダム建設、リゾート・マンション、観光道路の3つの開発について聞いたが、ダムと観光道路は前回とほぼ同様に開発容認派が多数を占めた。今回10%伸びたのは、リゾート・マンションの「ある程度は仕方ない」の44%。「地域の発展のために必要だと思う」を合わせ54%に達した。3つの開発とも「自然を守るためにも抑えるべき」は少数派になった。

ただ問19で聞いた地球環境との関係では「自分たちの生活が多少不便になっても、地球環境を守るためにひとりひとりが努力すべきだ」が73%となっている。

◆リゾート・マンションの開発



野生動物の被害、「数を規制」が6割に迫る

サルやシカの野生動物による農家被害は「数をコントロールして共存を図る」が前回より8%伸びて59%。「こらしめて、畑に来ないようにする」14%を含めれば規制派が7割を超えた。一方「自然の摂理であり、そのままにしておくより仕方ない」の放任派はさらに減り6%だった。

生活環境と被害

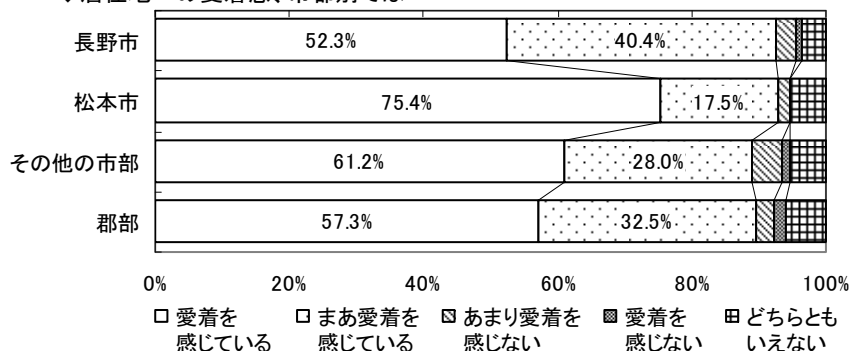
いま住んでいるところへ強い「愛着」6割

「愛着を感じている」60%、「まあ愛着を感じている」30%で、総体の数字90%は変わらないものの、愛着感が強まったと言える。特に松本市民は「愛着を感じている」が75%、長野市民の52%より20%以上も高かった。愛着度は生活満足度ともほぼ比例している。

身近な環境で重要だと思うことは「水のきれいさ」「緑の豊かさ」「大気きれいさ」の順番に変更はないが、「大気きれいさ」の割合が5割を割った。

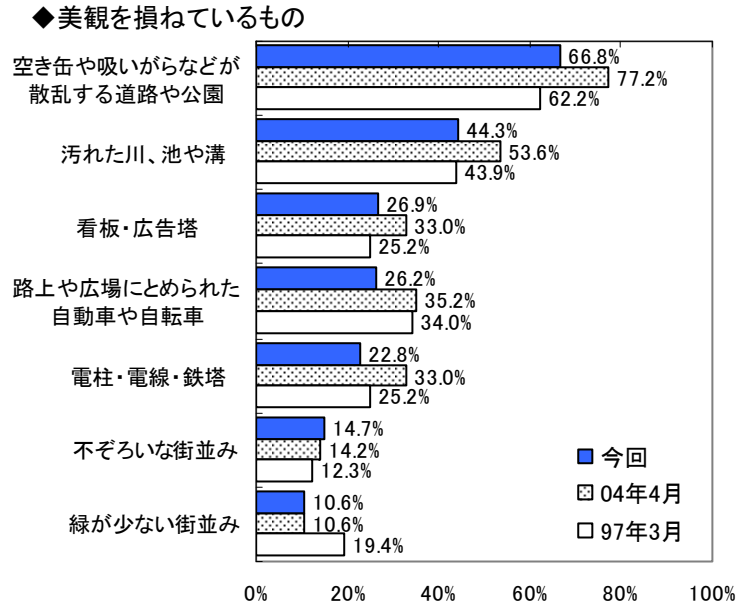
地域別では北信と東信は「緑の豊かさ」がトップで、中信・南信と違いが見られた。

◆居住地への愛着感、市郡別では



美観を損ねているワースト 1 位はいぜん「空き缶などが散乱」

地域の美観を損ねているワースト上位は大きな変動はない。「空き缶や吸いがらなどが散乱する道路や公園」「汚れた川、池や溝」に続き、今回は 3 位に「看板・広告塔」となった。「路上や広場にとめられた自動車や自転車」は 97 年、04 年調査より 8 ~ 9 % 減った。

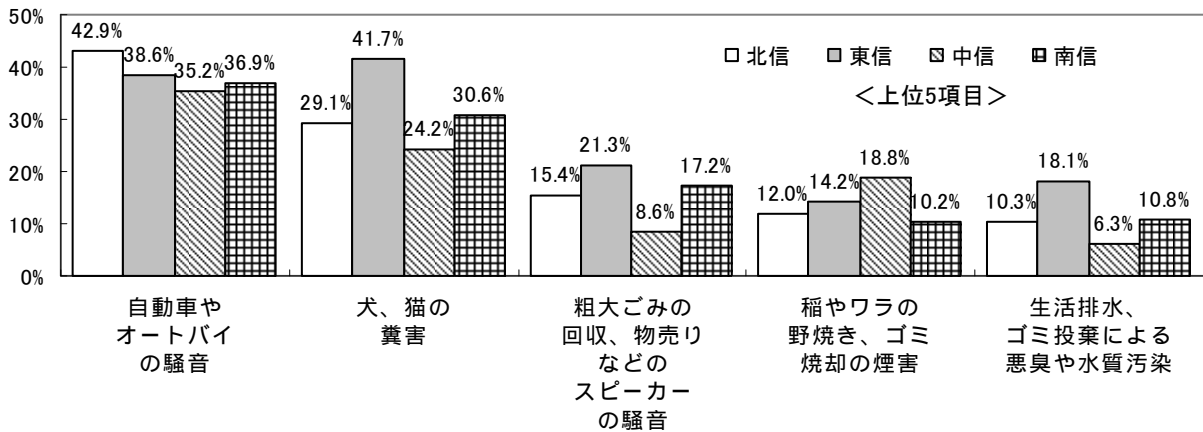


騒音被害は大きく減る

ここ数年間に受けた被害は、トップの「自転車やオートバイの騒音」が 39% で調査 3 回目にして 5 割を割った。「犬、猫の糞害」や「生活排水、ゴミ投棄による悪臭や水質汚染」「工場、建設現場から出る騒音や振動、悪臭、大気汚染」も漸減。ただ地域別では東信の被害トップが「犬、猫の糞害」で、ほかの 3 地域と異なっているのが特徴だ。

生活環境の 10 年前との比較でも、「良くなった」が全体で 50% に迫り、被害状況も全般に改善傾向を示している。

◆受けた被害、地域別では



車に依存する移動手段

身近な機関に行く交通手段を聞いた。駅、スーパー・コンビニ、中学校、銀行・郵便局、役場、医療機関、勤務先ともマイカー利用が圧倒的に多い。所要時間も勤務先を除けば、15 分以内が 7 ~ 8 割以上とマイカー依存を裏付けている。

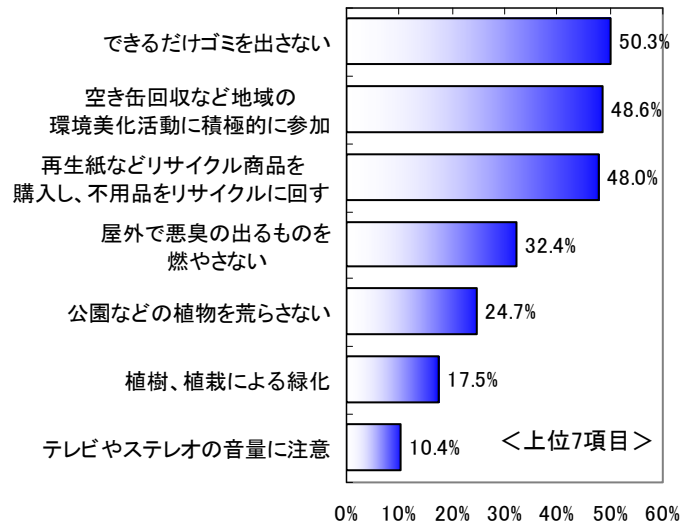
詳しい分析は 51 ページから掲載の坂井博通・埼玉県立大学教授の報告を参照されたい。

環境保全への取り組み

「できるだけゴミを出さない」50%

生活環境を守るために日ごろ心がけていることは「できるだけゴミを出さない」が、前回より微増の50%。次いで「地域の環境美化活動に参加」「リサイクル商品を購入し、不用品をリサイクルに回す」の順番。女性と50代、松本市民は「リサイクル商品購入」をトップに挙げている。また「地域の環境美化活動に参加」の割合は、県外出身者が56%で県内出身者より高い。

◆日ごろの心がけ



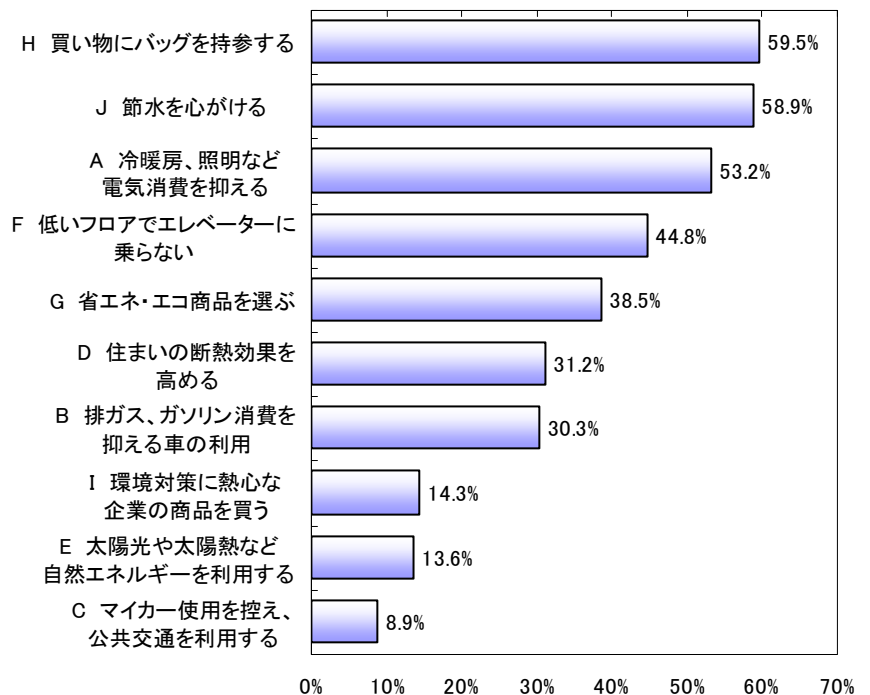
省エネ・省資源行動は「買い物バッグ持参」「節水」

日ごろ省エネ・省資源のために実行しているか、10項目を4段階で聞いた。「常に実行している」が5割を超えたのは「買い物バッグを持参」「節水」「電気消費を抑える」の3項目だった。

一方「全く実行していない」「あまり実行していない」合わせて50%超えは「マイカー使用の控え」「自然エネルギーの利用」「環境対策に熱心な企業の商品を買う」の3項目。特に「マイカー使用を控え、公共交通を利用する」を「実行していない」人は全体で78%に達している。

省エネ家電購入は41%、エコ減税カー購入は16%。ただ調査時点で「検討している」が3割を超えているので、その後に購入した人も相当数いたと思われる。

◆省エネ行動、「常に実行している」



地球環境を守るために

「国の政治」や「自治体の姿勢」に期待

自然破壊、環境破壊をくい止めるために力になるのは「国の政治」49%、「自治体の姿勢」48%が前回と同じく上位。「自然保護団体の活動」の評価は高まったが、「教育」「科学技術」「世論」「マスコミ」への期待感は低下している。

自分たちの生活との関係では、「今より多少不便になっても、地球環境を守るためにひとりひとりが努力すべきだ」が73%と、「より便利にすることを考えるべきだ」11%を大きく引き離している。

環境税の導入についても、賛成派が全体で48%と反対派を大きく上回っている。

情報取得の手段としては、「テレビ」85%、「新聞」75%が圧倒的で「インターネット」は17%。

◆環境破壊をくい止める力は

